本稿は「心理学研究」に掲載予定のプレプリントです。実際に掲載されるものとは異なる箇所が存在する可能性があります。引用の際は以下の情報をお使い下さい。

山田 祐樹 (印刷中). 巻頭言:新型コロナウイルス感染症と心理学 心理学研究, 92(5).

巻頭言:新型コロナウイルス感染症と心理学

山田祐樹

九州大学

はじめに

2019 年末から始まった新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の世界的流行は、これを執筆している 2021 年 7 月の時点でも収束の目処が立っていません。その間に COVID-19 は私達の生活を一変させ、マスク着用、手洗い、物理的距離の拡大といった感染防止対策やそれに伴う休業・休校、時差出勤、テレワークなどがもはや日常的なものとなってきました。そして同様の影響は研究者・教育者・実践家の活動にも現れました。例えば、対面での授業、実験・調査、心理支援は従来の形のままでは継続できなくなりました。学会や研究会といった各種ミーティングも軒並みオンラインでの開催へと移行しました。このような状況において、心理学者はどのようにあるべきなのかと多くの方が思ったに違いありません。

海外では心理学者たちがいち早く動き始めました。例えば 2020 年 3 月に Chris Chambers 氏が COVID-19 関連の有審査事前登録論文への迅速査読 (なんと一週間以内) を *Royal Society Open Science* 誌にて実施することを発表し、世界中のジャーナルへも賛同を求めました (Chambers, 2020)。そしてその呼びかけから 4 日後までに *Nature Human Behaviour* 誌など 9 つのジャーナルが参画します。翌月には、おそらくその迅速査読のイニシアチブのもと、42 名の研究者がパンデミックに関連すると思われるいくつかの心理学的研究トピックについて概説する論文を発表し、COVID-19 禍下でのさらなる研究の必要性を訴えました (Van Bavel et al., 2020)。こうした一連の情勢を鑑み、日本国内でも心理学者による COVID-19 関連の研究を効果的に促進することを目指して、2020 年 5 月から特集号の構想と準備を進めました。心理学研究誌としては創刊以来初の特集号企画であり、不慣れなことや予測できないことでいっぱいでした。当初は、全国的に COVID-19 で大変な時期に、果たして論文を投稿して頂ける方がどれだけいるのかという不安もありました。ところが蓋を開けてみると投稿論文数はのべ 76 本、そのうち掲載数は 20 本と、当初の心配は全くの杞憂であることが分かりました。むしろ、これだけの数の投稿を適切に一人でハンドリングできるのかという恐怖の方が私を慄かせることとなったのです。が、それはさておき、

次節からは本特集号の掲載論文についてごく簡単に紹介して参ります。

マスク着用・手洗い行動

掲載論文間にはいくつかの共通点がありましたが、その一つはマスク着用や手洗い行動についてでした。中谷内・尾崎・柴田・横井 (2021) は手洗い行動に関連する要因について、自他へのリスク低減、同調、不安といった点について調査しました。ところでこの研究は、先行して出版されたマスク着用の要因を検討した Nakayachi, Ozaki, Shibata, & Yokoi (2020) と共通のデータセットを使用していました。榊原・大菌 (2021) はこの Nakayachi et al. (2020) とほぼ同時期にリリースされた Sakakibara & Ozono (2020) とを比較し、両者の結果の再現性を確認しながらそれら調査間に存在する不一致の原因を探索しました。そしてマスク着用に影響する要因の変遷については、宮崎・鎌谷・河原 (2021) が 2018 年から実に 9 波に及ぶ時系列調査を実施した結果を報告しています。それに加え、鎌谷・伊藤・宮崎・河原 (2021) は、COVID-19 流行前後での黒色マスク着用者への印象変化についても検討しました。また、山本・岡 (2021) は、COVID-19 に感染した人々がマスク着用や手洗い等の感染予防を怠っていたかのように推定されてしまうステレオタイプやその関連要因について調査を行いました。感染予防行動にまつわるこれらの研究においてしばしば取り上げられたのは感染脆弱意識、行動免疫システム、ならびに規範です。今後も続くと思われる COVID-19 禍では、これらの要因がますます注目を集めていくことが予想されます。

生活変化

COVID-19 の蔓延に伴う生活の変化も共通して検討された話題でした。特に、遠隔授業の心理的影響や教育的効果についての検討は投稿論文の中でも扱われることの多いトピックでした。飯田他 (2021) は遠隔授業の受講数や負担感と経済的な負担感が大学生の精神的健康とどう関連するかを検討しました。同様に、内田・黒澤 (2021) は遠隔授業のために必然的に生じる視覚表示端末の長時

間利用が学生の心身へ与える影響について調査しました。それに加え、永井(2021)は、レポートや課題について真摯に取り組むといった学生の主体的な学修態度と遠隔授業への適合性の関連を調べ報告しています。また同様に中尾(2021)では、遠隔授業が実施され、キャンパスでの活動が制限される中での学生の精神的健康について、アタッチメントと孤独感に着目した検討がなされました。この孤独感については、杉山・Gallego Hiroyasu・林・四本(2021)も「Time Social Distancing」という国際共同研究での調査結果を(睡眠やクロノタイプなど他の測定結果も合わせて)報告しています。

冒頭で述べたとおり、パンデミック下では単に活動が制限されただけでなく、多くの教育機関が休業を余儀なくされました。そこで高坂(2021)は、臨時休業となった小学校児童における生活習慣の変化が、児童のストレス反応にどう影響するのかを調べました。そしてもちろん、COVID-19 禍によって生活に重大な変化が生じたのは児童や学生だけではなくありません。平井・渡邊(2021)は乳幼児の育児期にあり配偶者を持つ正規雇用の男性を対象とし、パンデミックにおける働き方、家庭関与、家庭・仕事満足度の変化やその要因を検討しました。このように、COVID-19 がもたらした人々の生活におけるさまざまな側面での変化は心理学の研究対象として取り上げられることが多いです。そして本特集号の掲載論文が扱っているトピックの他にも無数の題材が潜在的に存在しています。COVID-19 禍による生活変化の影響については、より幅広く多様な視点からの試みが今後も展開されてゆくでしょう。

臨床

遠隔での心理支援や臨床現場特有の問題を扱う研究も多く見られました。残念ながら本特集号に掲載されている数は多くありませんが、この話題を扱う論文が実は最も多く投稿されました。それだけ関心と危機感を持つ心理学者が多い話題であったとも言えます。上倉・大川・益子(2021)は、従来は対人接触とともに行われる臨床動作法を COVID-19 禍でもそのまま実施することは困難であるため、対面でも触れずに行うための方法を検討し、統合失調症者に対し適用した結果を報告しました。國見・岩崎・荻津・川端・櫻井(2021)は、大学院生等の非専門家が高校生に対し心理支援を行う取り組みである「キャンパスエイド」を遠隔で実施する上での運用可能性とありうる問題点について検討しました。また、このトピックでは現場のスタッフに着目した研究も多く、小岩・若島・浅井・高木・吉井(2021)は COVID-19 への看護師の感染恐怖について、看護師の個人的要因、労働状況、対処行動の 3 つの観点から明らかにしようとしています。現場では対面・遠隔どちらを選んだとしても必ず困難が待っており、その中で実践家は最善のやり方を求めて常にアップデートを重ねています。本トピックについてできるだけ多くの有用な知見が蓄積・共有され、その最適化の取り組みが大きく促進されることを期待します。

データ、ツール、意見

本特集号は、募集の際に「COVID-19 に関係するあらゆる心理学的な論文を募集いたします」と述べていました。これに呼応するよう

に、特集号ならではの論文も数多く投稿されました。その一つが山縣・寺口・三浦(2021)によるデータペーパーです。この論文は行動免疫システムに着目し、リスク認知、感染予防行動、感染忌避、道徳性、排斥的態度などのほか、COVID-19 への認知、生活実態、科学的知識等の測定を、まだ 1 回目の緊急事態宣言が出される前の 2020 年 3 月下旬に実施し、データセットを公開・共有しています。小林(2021)は、COVID-19 禍にて急激に需要が増大しているオンライン実験において、記述式のテストを行う際の「変換」問題を解決するための lab.js 用のオープンソースプラグインを開発し、それを用いた実践形式のデモンストレーションを行っています。こうした有用性の高いデータセットやツールは、さらなる COVID-19 研究を喚起する上でとても重要です。

さらに、本特集号には展望論文も多く寄せられました。これらは特定の研究トピックについて概観する従来の展望論文とはやや異なり、COVID-19 禍をさまざまな視点から議論する「意見」の意味合いを有していました。我々はこのような意見を扱う論文については、示唆性、論拠の明確さ、心理学分野との適合性といった観点を主に評価いたしました。これらは従来の評価項目と少し異なる部分もありますので、いくつかの展望論文については「意見」に属するものであることを示すため編集委員会からの注釈を入れております。では個別の論文を見ていきます。鬼頭・前田(2021)は、COVID-19 の感染拡大状況について社会生態学的要因である関係流動性に着目し、日本における初期の感染拡大が抑制されたことの考察と、今後の終息が遅れるかもしれないという予測を行っています。木下(2021)は、COVID-19 のリスクコミュニケーションに関して社会心理学・リスク学的視点から議論し、著者のこれまで関与してきたケースを吟味しつつ、リスクコミュニケーションのあり方や COVID-19 禍そのものについて実に大局的な考察を提示しました。三田地(2021)は本特集号募集時の「いま心理学者は何をすべきか」という問いかけについて、今はまだ個人や学会のどちらのレベルでも貢献が不十分であり、心理学者はより強い覚悟を持って COVID-19 を始めとする社会問題に挑むべきであると指摘しています。いずれも大変個性的なメッセージを発しており、このような議論を喚起できたことはまさに特集号ならではのものでした。

特集号が炙り出した諸論点

ここまで紹介してきたように、本特集号には非常に多くの意義深い論文が投稿・掲載されております。各論文の示唆するものについては、それぞれ実際にお読み頂ければよくお分かりになることと思います。その他、いくつかの論文は特集号に投稿されたものの審査の終了が今号に間に合わない等の都合により、一般号にて掲載されることとなってしまいました。とはいえ、これらの論文にも大変魅力的なものが揃っています。また本特集号は、COVID-19 が日本でも脅威となり始めてからほんの 3 ヶ月程度で投稿募集に至りましたが、この前例のないスピード感での企画運用は編集委員会にとって大きな収穫となりました。しかし、こうしたポジティブな側面がある一方で、今回の企画立案から実際の出版に至る過程において、いくつかの教訓や問題点も浮き彫りとなってきました。

文献爆発: 企画者の立場としては投稿論文数が異例の多さであったことを純粋に喜んでいるのですが、これは世界的には懸念されている傾向でもあります。それは、「Covidization」とも呼ばれる COVID-19 パンデミック下における発表文献数の急増です (Pai, 2020)。実際に、参考までに心理学系プレプリントサーバーである PsyArXiv におけるリリース数を見てみると、2358 本 (2018 年)、3604 本 (2019 年)、6261 本 (2020 年) というように 2020 年を境に急増しており、今年もさらにペースが上がって 7 月 25 日の時点で既に 4010 本のプレプリントがリリースされています。「COVID」と検索するだけで 1400 本がヒットし、その他にも多くの COVID-19 研究が存在する可能性があります。プレプリントを指標とするのは妥当性に問題があるかもしれませんが、単にプレプリントの利用が普及した時期と一致しただけかもしれません。しかしながら、*Nature* 誌が行ったより詳細な調査でもこの傾向は明らかとなっています (Else, 2020)。心理学研究誌でも *Japanese Psychological Research* 誌でも 2020 年度の投稿論文数は過去最多を記録しました。こうした論文数の増加が単にステイホームのおかげで研究者に論文を書く余裕が生まれたためであれば良かったのですが、実際は COVID-19 という新規な研究トピックについての出版競争が起きており、そのために質の低い論文が量産されていることが問題視されています (Jung et al., 2021)。*Retraction Watch* によれば、7 月 25 日時点での COVID-19 関連の撤回論文数は既に 147 本に達しており (<https://retractionwatch.com/retracted-coronavirus-covid-19-papers/>)、拙速な出版が横行している証左となっています。このような文献爆発の原因と過程を正確に理解し、研究を適正化することが重要になっていくでしょう。

ファイルドローワー問題: 古くから、研究データの多くが公表されないままお蔵入りになっている点が指摘されてきました (Rosenthal, 1979)。このファイルドローワー問題は出版バイアスとセットで語られることが多く (池田・平石, 2016)、つまり有意な結果を報告する論文でなければ出版されにくいいため、有意でない結果を示した論文のデータは公表されないことになります。ゆえに、この問題は研究結果の再現性問題と絡めて語られることが多いのです (Francis, 2012)。ところがそれだけでなく、ファイルドローワー問題は研究倫理とも関連すると考えています。心理学の研究データは「人」から得ています。特に COVID-19 禍では、どんな人々ももれなく通常よりも大変な状況下にあり、参加者は一定以上の苦しみの中でなんとか研究に協力してくれています。そのようなデータを死蔵させたままで果たして良いのでしょうか。今回の特集号では、実に 75% もの投稿論文の掲載を見送る必要がありました。ではそれらの論文が収録していたデータはどうなってしまうのでしょうか。今後、首尾よく別のジャーナルに掲載されるならば良いのですが、本特集号に掲載されなかった全ての論文がそのような幸せな結末を迎えられるとは残念ながら思えません。

この状況を改善するためにはいくつかの手が考えられます。一つは山縣他 (2021) のようなデータペーパーを積極的に投稿する空気を醸成することでしょう。私も COVID-19 関連のデータペーパーを出した経験がありますが (Yamada et al., 2021; Yamada, Xu, & Sasaki, 2020)、結果の有意性などを気にせず、データ取得の重要性和測

定精度に集中できる研究は開放感があって楽しいものでした。同様に、マイクロパブリケーション (Yamada, 2020; 日本語での詳細な説明はこちら: <https://note.com/momentumyy/n/n0bfd14103ab7>) の形式で、方法と結果のみに特化した論文が出版可能になることが期待されます。注意すべきなのは、こうして単にデータだけ報告しやすくしても、そのデータのクオリティが低ければ二次分析やメタ分析に使うことはできないということです ("Garbage In, Garbage Out")。そのため、なんと言ってもやはり有審査事前登録論文を国内誌 (心理学研究誌を含む) ももっと扱っていくべきということになります (長谷川他, 2021)。この方式では、データ収集前に研究プロトコルへの査読を通過した研究は結果の如何を問わずに原則的に出版が保証されるため、ファイルドローワー問題を回避でき、査読によって測定精度の問題も解消できます。本特集号の審査では、研究対象の面白さや貴重さは必ずば抜けていても、測定方法に難があったため掲載を見送るというケースがいくつもありました。ですがこれらはデータ収集前にプロトコルに対して査読を行い修正すればほとんどが解決できるもので、とても勿体ないと感じていました。

では、プロトコルに対して査読を受けていたらデータを取る「匂」を逃してしまうのでしょうか？先に述べた *Royal Society Open Science* 誌の実施した迅速査読を我々は体験してみましたが (Yonemitsu et al., 2020)、どれだけ早く開始できるかは著者次第かもしれません。というのも、査読は必ず 7 日以内に完了したため、著者側がそれに迅速に対処できるかどうかで調査開始までの期間が全て決まりました。かといって査読が杜撰に行われたわけではなく、むしろ過去最多の査読者 (5 名) による過去最多のコメント量でした (公開されている査読履歴は 119 ページもあります)。国内誌でも専用の査読システムさえ構築できれば同様の迅速な取り組みが実現できるのかもしれませんが。同時にそのような査読システムでは査読者が圧倒的に不足する状況が生じ得ますが、*Royal Society Open Science* 誌では査読者のプール化がテストされています。この取組は他のジャーナルも参考にできると思います。

倫理審査: 倫理審査については現在とても複雑な状況にあると考えられます。倫理審査を義務付けることによって、研究倫理審査委員会を設置できない機関に所属される方や、所属自体がない方からの投稿を妨げることはできません。実際、本特集号に投稿された論文にも倫理審査を受けられなかったものが存在しました。おそらくその理由の多くは、狙っている時期のデータ取得に審査が間に合わなかったためではないかと推察します。しかし、ある査読者は「災害などの特殊かつ緊急の事情がある時には、所属機関の研究倫理委員会をバイパスして研究を実施して良いという暗黙のルールが、研究者社会に醸成される恐れを懸念する」とコメントしました。研究倫理が何のために存在するのかを考えると、研究行為によって損害を受けやすい参加者や資料などの対象の保護やあるいは研究公正のためであり、それが災害時に蔑ろにされるのは本末転倒なのです。むしろそのような時こそ、適正な研究であることの確認と保証がしっかりとされるべきでしょう。

では、即時に倫理審査を受けられないような緊急性の高い研究は諦める方が良いのでしょうか？おそらくですが、リスク認知や社会心

理学など災害時の心理を研究対象とされている方々は平時から緊急時を想定した研究計画を立て、事前に審査を通されているのかもしれませんが。所属機関にこうした申請を認めている倫理委員会があればそれを活用するのが良いでしょう。ところが、パンデミックのような世界的災害が発生し、多様なサンプルを多角的に研究する国際間のコラボレーションが重要となる事態を考えてみますと、それを平時から想定しておくことはかなり難しくなってきます。緊急時にも機動的に倫理審査の機能を提供する独立した審査機関の設立構想まで含め、倫理審査のシステムについては今後も活発な議論が必要に感じます。

意見表明の場: 本特集号での「意見」に相当する展望論文の審査において、ある査読者から「会員の意見を吸い上げるプラットフォームが学会内にあってもよいのではと思いました」とのコメントも頂きました。どのような形でそれを実現するのが相応しいかについては議論を重ねる必要がありますが、今回の特集号企画を通して、会員からのニーズが確実に存在していることは明らかとなりました。今後の課題として学会内で前向きに検討されることを期待します。

特集を編集していくうえでの技術的な改善可能性

ここまでの話の他にも、初めての特集号の実践から見えてきたいくつかの改善可能な点について挙げてみます。冒頭で述べたように、今回の特集号には予想を遥かに超えるご投稿をいただきました。このことは大変ありがたい一方で、私の処理限界を超えてしまうことも意味していました。ゆえに第一に、特集号の担当編集委員にはチームを組織するのが良いだろうと身に沁みて感じました。次に、他誌では多く取り入れられていますが、本誌でも事前登録制度を導入する必要があるのではと考えました。これは長谷川他 (2021) の説明するいわゆるプレレジの意味ではなく(プレレジも役立つと思いますが)、「投稿の登録」のことです。本特集号では新規な取り組みとして、投稿前質問 (pre-submission inquiry) を導入しておりました。これは元々、トピック違いの投稿の可能性を懸念して用意していたのですが、むしろこの投稿前質問を簡易スクリーニング(トライージ)といった形で、事前登録システムの一部として活用するのが有効かもしれません。

もう一つは査読の事前依頼です。査読者の先生方も非常にお忙しく、こちらがお願いしたタイミングですぐに審査いただくことは大変困難です。前述のような事前登録をしておけば、予定される投稿のタイミングに合わせて事前に査読候補者に連絡を取り、査読をスケジュールしておくことが可能になり、今よりスムーズに審査が行えるかもしれません。私が運営委員として参画している *PCI Registered Reports* という出版組織があるのですが、そこで行われている

Review

(https://rr.peercommunityin.org/help/guide_for_authors#h_61998243643551613309672490) という方式の査読プロセスで実際に同様の経験をしました。ここでは事前にスナップショットと呼ばれる研究内容の要約を投稿し、査読可であるとトライージされた場合に限り、完成版原稿の投稿予定日が設定され、査読者が手配されます。この方法により、我々の原稿は 5 日間で査読が終わりました。査読者側

もいつ査読すればよいかが事前に分かるので予定を空けやすいようです。同様の方法を特集号で採用するのは比較的容易なのではないかと思われます。

おわりに

いろいろと述べて来ましたが、総じて本特集号はやはり画期的な取り組みであったと思います。収録された論文はどれも魅力的ですし、学術的にも制度的にも見えてきた諸問題はどれも重要です。本特集号の編集を担当するにあたり、このような稀有な機会を与えてくださった編集担当常務理事の原田先生、心理学研究編集小委員会正副委員長として常に親身になってサポートして頂いた中村知靖先生、浅野倫子先生、上瀬由美子先生、深谷達史先生、そしてご協力とご理解を賜った編集委員の先生方に大きな感謝を捧げます。次に、数ある出版先候補の中から本特集号を投稿先に選んで頂いた述べ 229 名の著者の方々、そしてそれをお忙しいなか審査して頂いた述べ 179 名の査読者の方々にも深く御礼を申し上げます。そして何より、本特集号の論文を手にとり頂き、今後の糧とし、COVID-19 パンデミックによる大きな変化を経た未来の心理学を共に創造して下さる読者の皆様。いち心理学者として、同志として、皆様と共に歩めることに心からの喜びを申し上げます。

文献

- Chambers, C. (2020). CALLING ALL SCIENTISTS: Rapid evaluation of COVID19-related Registered Reports at Royal Society Open Science. *NeuroChambers*. Retrieved from <http://neurochambers.blogspot.com/2020/03/calling-all-scientists-rapid-evaluation.html> (March 16, 2020)
- Else, H. (2020). How a torrent of COVID science changed research publishing - in seven charts. *Nature*, 588(7839), 553. <https://doi.org/10.1038/d41586-020-03564-y>
- Francis, G. (2012). Publication bias and the failure of replication in experimental psychology. *Psychonomic Bulletin & Review*, 19(6), 975-991. <https://doi.org/10.3758/s13423-012-0322-y>
- 長谷川龍樹・多田奏恵・米満文哉・池田鮎美・山田祐樹・高橋康介・近藤洋史 (2021). 実証的研究の事前登録の現状と実践——OSF 事前登録チュートリアル—— 心理学研究. <https://doi.org/10.4992/jipsy.92.20217>
- 平井 美佳・渡邊 寛 (2021). 乳幼児の父親におけるパンデミックによる働き方の変化と家庭と仕事への影響 心理学研究, 92(5).
- 飯田 昭人・水野 君平・入江 智也・川崎 直樹・斉藤 美香・西村 貴之 (2021). 新型コロナウイルス感染拡大状況における遠隔授業環境や経済的負担感と大学生の精神的健康の関連 心理学研究, 92(5).
- 池田 功毅・平石 界 (2016). 心理学における再現可能性危機: 問題の構造と解決策. 心理学評論, 59(1), 3-14. <http://ci.nii.ac.jp/naid/130006701400/ja/>
- Jung, R. G., Di Santo, P., Clifford, C., Prosperi-Porta, G., Skanes, S., Hung, A., ...Hibbert, B. (2021). Methodological quality of

- COVID-19 clinical research. *Nature Communications*, 12(1), s. 943, doi:10.1038/s41467-021-21220-5.
- 鎌谷 美希・伊藤 資浩・宮崎 由樹・河原 純一郎(2021). COVID-19 流行が黒色衛生マスク着用者への顕在的・潜在的態度に及ぼす影響 心理学研究, 92(5).
- 上倉 安代・大川 一郎・益子 洋人(2021). コロナ禍における統合失調症者を対象とした触れない動作法の試み 心理学研究, 92(5).
- 木下 富雄(2021). 深層防護とリスクコミュニケーション——大規模感染症に対する社会心理学からの貢献—— 心理学研究, 92(5).
- 鬼頭 美江・前田 友吾(2021). COVID-19 の感染拡大および終息に与える関係流動性の影響——社会生態学的視点からの考察—— 心理学研究, 92(5).
- 小林 正法(2021). 再生テストに基づく記憶現象のオンライン実験による再現 心理学研究, 92(5).
- 小岩 広平・若島 孔文・浅井 継悟・高木 源・吉井 初美(2021). 我が国における看護師の新型コロナウイルス感染症への感染恐怖の規定要因 心理学研究, 92(5).
- 國見 充展・岩崎 眞和・荻津 智絵・川端 珠美・櫻井 由美子(2021). キャンパスエイド活動における遠隔心理支援の試み 心理学研究, 92(5).
- 三田地 真実(2021). コロナ禍での心理学者の果たすべき役割とは何か? ——人々の声を聴いて行動を起こす必要性—— 心理学研究, 92(5).
- 宮崎 由樹・鎌谷 美希・河原 純一郎(2021). 社交不安・特性不安・感染脆弱意識が衛生マスク着用頻度に及ぼす影響 心理学研究, 92(5).
- 永井 暁行(2021). コロナ禍の非対面授業における学生の主体的な学修態度——非対面授業との適合との関連—— 心理学研究, 92(5).
- 中尾 達馬(2021). コロナ禍での大学生におけるアタッチメントと孤独感や精神的健康との経時的な相互関係 心理学研究, 92(5).
- Nakayachi K., Ozaki T., Shibata Y., Yokoi R. (2020). Why do Japanese people use masks against COVID-19, even though masks are unlikely to offer protection from infection? *Frontiers in Psychology*, 11:1918. <https://doi.org/10.3389/fpsyg.2020.01918>
- 中谷内 一也・尾崎 拓・柴田 侑秀・横井 良典(2021). 新型コロナウイルス拡大期における手洗い行動の規定因 心理学研究, 92(5).
- Pai, M. (2020). Covidization of research: What are the risks? *Nature Medicine*, 26(8), 1159. <https://doi.org/10.1038/s41591-020-1015-0>.
- Rosenthal, R. (1979). The file drawer problem and tolerance for null results. *Psychological Bulletin*, 86(3), 638–641. <https://doi.org/10.1037/0033-2909.86.3.638>
- Sakakibara, R., & Ozono, H. (2020). *Psychological research on the COVID-19 crisis in Japan: Focusing on infection preventive behaviors, future prospects, and information dissemination behaviors*. PsyArXiv. <https://doi.org/10.31234/osf.io/97zye>
- 榊原 良太・大藪 博記(2021). 人々がマスクを着用する理由とは——国内研究の追試とリサーチクエストの検証—— 心理学研究, 92(5).
- 杉山 翔吾・Elisa M Gallego Hiroyasu・林 正道・四本 裕子(2021). 外出規制が孤独感・不安・抑うつに及ぼす影響——日本在住者を対象とした縦断的研究—— 心理学研究, 92(5).
- 高坂 康雅(2021). 親の認知した臨時休業中の小学生の生活習慣の変化とストレス反応との関連 心理学研究, 92(5).
- 内田 知宏・黒澤 泰(2021). コロナ禍に入学した大学一年生とオンライン授業——心身状態とひきこもり願望—— 心理学研究, 92(5).
- Van Bavel, J. J., Baicker, K., Boggio, P. S., Capraro, V., Cichocka, A., Cikara, M., ...Willer, R. (2020). Using social and behavioural science to support COVID-19 pandemic response. *Nature Human Behaviour*, 4, 460–471. <http://doi.org/10.1038/s41562-020-0884-z>
- Yamada, Y. (2020). Micropublishing during and after the COVID-19 era. *Collabra: Psychology*, 6(1), 36. <https://doi.org/10.1525/collabra.370>
- Yamada, Y., Čepulić, D., Coll-Martin, T., Debove, S., Gautreau, G., Han, H., ...Lieberoth, A. (2021). COVIDiSTRESS Global Survey dataset on psychological and behavioural consequences of the COVID-19 outbreak. *Scientific Data*, 8:3. <https://doi.org/10.1038/s41597-020-00784-9>.
- Yamada, Y., Xu, H., & Sasaki, K. (2020). A dataset for the perceived vulnerability to disease scale in Japan before the spread of COVID-19. *FI000Research*, 9:334. <https://doi.org/10.12688/fi000research.23713.2>
- 山縣 芽生・寺口 司・三浦 麻子(2021). COVID-19 禍の日本社会と心理——2020 年 3 月下旬実施調査に基づく検討—— 心理学研究, 92(5).
- 山本 真菜・岡 隆(2021). 新型コロナウイルス感染者に対するステレオタイプと行動免疫システム活性化の個人差との関連 心理学研究, 92(5).
- Yonemitsu, F., Ikeda, A., Yoshimura, N., Takashima, K., Mori, Y., Sasaki, K., ...Yamada, Y. (2020). Warning ‘Don’t spread’ vs. ‘Don’t be a spreader’ to prevent the COVID-19 pandemic. *Royal Society Open Science*, 7:200793. <http://dx.doi.org/10.1098/rsos.200793>.